

NGOのNGなハナシ

今となっては笑い話だけど、ヒヤリ、ドッキリした瞬間、思い出したくもない恥ずかしい経験。そんなエピソード、NGO人生の中で誰にでもあるはずですよ。

今回は、メーカー勤務時代、希望を上司にうまく伝えられず、自分の足りなさに気づき、勉強のため退職。アメリカの大学院を卒業し、「もっと勉強したことを活かした方がいい」という友人のすすめをきっかけに、気がついたら旧ユーゴスラビアで働いていたという、JのK山さんのお話です。

TPO をわきまえて

旧ユーゴスラビア駐在前の1994年にネパールへ赴任した。とにかく何も分からないまま行ってしまったのだけど、地元の人に溶け込みたくて、サリーを購入。日常用のもではなく、パーティーなどで着るきらびやかな方。嬉しくてお出かけするたびに着ていた。それで、UN〇CRとのミーティングに、どんな格好をしていいかわからず、このサリーを着て行ってしまった。しかもこれから信頼関係を作り、プロジェクト実施パートナーになろうという大事な会議に。

駐在したばかりのスタッフに、「UN〇CRとの初めてのミーティングに何を着て行ったらいいかわからない」と最近質問され、「普通の格好でいいのよ、TシャツとGパンで」って笑いながら言ったんだけど、「(当時の)私も分かってなかった？」って(笑)。

今考えると本当に恥ずかしい。皆がTシャツ、Gパンの所に結婚式の服を

着て行っちゃったみたいなき感じですよ。

新人たちには会議での服装などのTPOも細かくサポートしてあげなくちゃいけないんだなということと、自分自身のことではTPOは少しずつ学んでいくものだなと思いました。

山道でブレーキが…

旧ユーゴに駐在している時、活動に使う車を私用に使いたくなかったので、中古で自分の車を買っていた。愛車はフランスのシトロエン。シトロエンはハイドロリックオイル(油圧オイル)で動くシステムになっていて、このオイルがだめになるとハンドルもブレーキもきかなくなる。

ある時、休暇でボスニアを走っていると、ブレーキがきかなくなってきた。シトロエンなんてそもそも走ってないし、特殊なオイルなので、エンコしたらどうすることもできない。山道を走っていたのでハンドルが切れなくなったら大変なことになると思いながら、やっとの思いで田舎の村に到着。

整備屋に行ったら、やはりオイル漏れを起こしていたことが判明。ただやっぱりここにもオイルがない。困り果てて、同じくシトロエン好きで車に詳しいサラエボにいるスタッフに助けを求めると、「しょうがないから、天ぶらを揚げる時に使うひまわり油を買って来い」。天ぶら油を2ℓ入れたら、普通に動いて無事に帰ってくることができました。ひまわり畑は大大好きだったけど、こんな風にお世話になるとは。それ以後、「K子の車はひまわり油で走る」とネタにされたのは言うまでもありません。

入国スタンプ

コソボ紛争が起こり、NATOの空爆が始まった直後の1999年4月、避難した駐在スタッフに給料を持っていくため、ボスニアからセルビアに入った。もともと一つの国だったので国境を越えることには柔軟で、いつも通りパスポートにスタンプを押してもらわずに入国してしまった。そうしたら、セルビアから戻る際、「お前はいつ、どこから入ったんだ!」と密入国扱いされ、



警察に捕まってしまった。

本来であれば、入国スタンプを押してもらうのは当たり前。特に戦争中は、自分の身分が怪しくないことをいつでもどこでも証明しなくてはならない。それなのに、ついついのくせで、「スタンプ押されるとページ使っちゃうから要らないよ～、いいから～いいから～」くらいの感じで…。

運転手さんがすぐく守ってくれた。「この人捕まえていいと思ってるのか、お前ら。こんな戦争中に、皆がどんどん逃げていく中、わざわざ入ってきて支援してくれた人だって分かってんのか!後でどうなっても知らないぞ」と、ずっと警察に言ってくれ、釈放されたんです。こっだけ話すと美談なんですけど…。危機管理的に大いに恥ずかしいことでした。

●あとがき (渡辺李依)

K山さんの危機管理術は今やビジネスでもお手本になると数々のメディアで取り上げられるほど。どこで学んだんですか?と聞いたところ、「現場で、と言えば聞こえがいいけど、昔はぶっつけでした!」と笑顔で答えが返ってきました。